

## 登美子の忘れ草

辻 憲男（文学部教授）

明治33年（1900）11月、登美子と晶子は大阪住ノ江の海岸に遊んだ。数日前、鉄幹を慕って京都永観堂の紅葉を見たばかりだった。登美子の、

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ  
はこの時に出来た。紅い恋の花はそっと友にゆづり、わたしはひとり背を向けて忘れ草を摘む。古歌の例のように、草に添えて、と書いて『明星』に投稿した。まもなく、登美子は親の決めた結婚のために若狭へ帰った。

住ノ江は白砂青松の景勝、平安朝の「歌枕」である。『土佐日記』の中に、「住ノ江に舟さし寄せよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく」という歌がある。土佐で女兒をなくした母親が忘れ草を摘んで、「恋しき心地しばし休めて、またも恋（こ）ふる力にせむ」と思った。忘れようとて忘れられるものではない、愁い悲しみをせめていつ時忘れて、以後も恋う力！にしようというのである。仮装した作者・紀貫之（きのつらゆき）にも、別に「恋の苦しさを忘れる草」の作がある（古今和歌集）。

古歌の忘れ草は萱草（かんぞう）のこと。夏に赤い花をつける。しかし登美子の歌はそれではなく、やはり恋しい人をあきらめる意味であろう。できることなら、愛児を恋うた古人のように、忘れ草をわが恋力にしたかった…。

晶子は己の恋を貫き、翌春出奔して鉄幹と結婚した。『みだれ髪』の399首は咲き誇る真紅の花であった。



夏の浜寺の歌会で、登美子も晶子も鉄幹に魅了された。  
堺市の南海電車浜寺公園は、今も明治の木造駅舎。